

# モモの予備摘果

県北農林事務所伊達農業普及所  
JAふくしま未来伊達地区モモ生産部会

**4/11の降霜により、大きな被害が発生しております。  
結実状況が確認できるまで摘果作業は控えましょう。**

## 1 気象経過

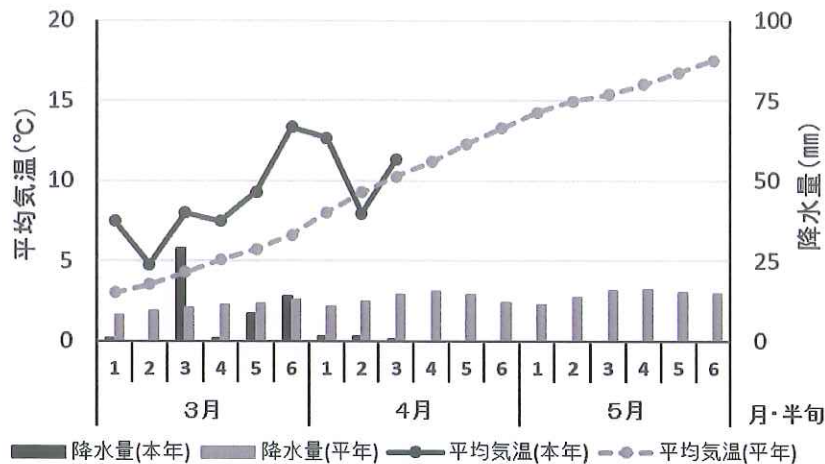


図1 平均気温と降水量の推移（観測地点：伊達市梁川町）

## 2 生育経過 **昭和57年の観測開始以来、最も早く推移しました。**

管内の調査ほ場における「あかつき」の開花始めは3月30日、満開は4月5日であり、ともに  
平年より14日早かった。

表1 生育概況

(調査地：桑折町伊達崎)

品種	開花始め			満開		
	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
あかつき	3/30	4/13	4/2	4/5	4/19	4/9
川中島白桃	3/31	4/13	4/4	4/8	4/19	4/11

## 3 栽培管理

### (1) 「あかつき」の摘果時期の目安

作業内容	時期	備考
予備摘果	4月25日～5月5日頃 (満開後20～30日頃)	最終着果量の50%増とする。 (霜被害が大きい場合は着果量確保を優先する)
仕上げ摘果	5月15日～5月25日頃 (満開後40～50日頃)	最終着果量の20%増とする。
(硬核期)	5月26日～6月12日頃 (満開後51～68日頃)	障害果の発生を助長するので摘果作業を控える。

※摘果程度は樹勢等に応じて調整する。

※硬核期は満開後の気温が高く経過すると時期が早まるので注意する。

(2) 摘果

【予備摘果】

目的: 果実の初期肥大を促進し、新梢の伸長を確保する。

時期: 通常満開後 20 日頃から実施するが、今年は広い地域で霜の被害が発生しているため、確実に着果を確認後、作業を開始する。

留意点: 結果枝当たりの着果数は、長果枝に4~5果、中果枝に2~3果、短果枝2~3本に1果を目安とする。なお、霜の被害が大きい園地では被害の状況が明らかになるまで遅らせ、着果量の確保に努める。

表2 着果調節の目安

樹勢	予備摘果
強樹勢	最終着果量の2倍程度
普通	最終着果量の50%増
弱樹勢	最終着果量の20%増

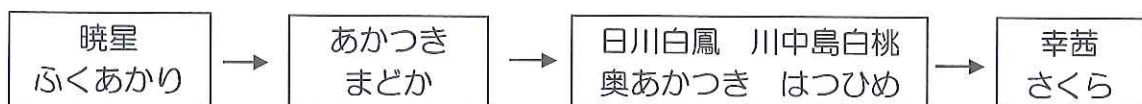
【予備摘果のポイント】

- ① 「暁星」「ふくあかり」等の花粉がある早生品種から作業に入る。生理落果や核割れの多い「日川白鳳」等は数回に分けて行う。
- ② 次に花粉がある中生品種で結実の良い「あかつき」「まどか」等の作業に入る。
- ③ 「川中島白桃」「はつひめ」等の花粉が無い、または少ない品種は、結実を確認してから作業に入る。結実量が少ない場合は仕上げ摘果を主体に行う。
- ④ 葉芽のある位置に優先的に着果させる。
- ⑤ 目通りの高さの着果量を100とすると、日当たりが良い上部は110~120、下部や樹冠内部は80~90程度の着果量とする。特に今年は霜で下枝の着果不足が想定されるので上部に果実を多く残し、できるだけ果実数を確保しましょう。
- ⑥ 樹勢の弱い樹は早めに着果量を制限し、樹勢回復を図る。樹勢の強い樹は、最終着果量の2倍程度を限度に果実を多めに残し、仕上げ摘果及び修正摘果で目標着果量に制限する。

表3 摘果の目安

結果枝	長さ	予備摘果
極短果枝	5cm以下	2~3本に1果
短果枝	5~15cm	2~3本に1果
中果枝	15~30cm	2~3果
長果枝	30~50cm	4~5果
極長果枝	50~100cm	葉芽当たり1果

〔摘果の順序〕



【長果枝・中果枝の摘果程度の目安】※樹勢普通(最終着果量の50%増)の場合

枝を上から見た場合の模式図

○: 残す果実 ◎: 摘果する果実

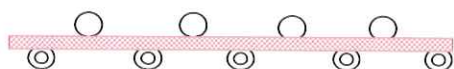
結果枝	長さ	予備摘果	仕上げ摘果
長果枝	30cm以上		
中果枝	15~30cm		

※予備摘果時に枝の長さ15cmに2個残すのが目安となる。

【倍量着果の場合】※縦に並べて残すのではなく、目標着果部位の左右に倍量を置く。

△仕上げで迷う

○正しい倍量



### (3) 追肥の考え方

**着果量が少ない園地では、追肥を控えましょう。**

基肥追肥一発型肥料の「みらいる物語もも基肥(12-10-3)」を基肥に使用した場合は、「あかつき」等の中生種までの品種では追肥の実施を控える。なお、「川中島白桃」以降の晩生種では、樹勢に応じて追肥を実施する。

### (4) かん水の実施

満開から約1カ月は細胞分裂期に当たるため、晴天が1週間以上続くなど、土壌の乾燥が見られる場合は適宜かん水を実施する。なお、かん水ができないほ場では樹冠下マルチを実施するなど土壌水分の蒸散を防ぐ。

## 4 病害虫防除

**せん孔細菌病の春型枝病斑は見つけしだい、速やかにせん除し、適切に処分しましょう！**

### (1) 当面の薬剤散布

本年はモモの生育が平年に比べて早まっているため、表4の防除日程を参考に薬剤散布が遅れないように実施する。

表4 薬剤散布時期の目安（「あかつき」の満開が4月5日の場合）

散布回数	散布時期	主な対象病害虫	使用薬剤	濃度
第4回	落花10日後 (4月21日頃)	黒星病、灰星病 うどんこ病	ストロビードライフロアブル	2,000倍
		モモハモグリガ アブラムシ類	モスピラン顆粒水溶剤	2,000倍
		せん孔細菌病	クプロシールド クレフノン	1,000倍 100倍
	4月21日頃	リンゴコクモンハマキ モモハモグリガ モモシンクイガ ナシヒメシンクイ	コンフューザーMM	100本/10a
第5回	5月1日頃	黒星病	イオウフロアブル	500倍
		せん孔細菌病	マイコシールド	2,000倍
第6回	5月11日頃	せん孔細菌病	クプロシールド	1,000倍
			クレフノン	100倍
第7回	5月21日頃	せん孔細菌病	マイコシールド	2,000倍
		黒星病	チオノックフロアブル	500倍
		モモハモグリガ シンクイムシ類 ハマキムシ類 コスカシバ	フェニックスフロアブル	4,000倍

注1：上記の農薬使用法は令和3年4月14日現在の農薬登録内容に基づき記載した。

注2：散布回数の記載はJAの令和3年版果樹病害虫防除暦に準じた。

注3：展着剤は適宜加用する。

注4：その他の注意点はJAの令和3年版果樹病害虫防除暦に従う。

## (2)モモせん孔細菌病対策

本年は3月20日から春型枝病斑(写真1)が見られている。例年4月から発生が多くなることから、見つけ次第随時せん除する。

展葉後の葉に2次感染する前に、春型枝病斑は見つけ次第必ずせん除し、ほ場外に持ち出すか土中に埋める等適切に処分し、伝染源の密度低下に努める。

ア 1年枝の黒変や新梢葉の生育不良を目安に発病が疑われる枝は見つけ次第、切除する(写真1)。

イ 病斑から水滴により菌が移動している可能性があることから、短果枝は基部ごと、中長果枝は基部ごとまたは基部付近の葉芽まで切除する。

ウ 第4回のクプロシールド(クレフノン加用)を散布後、樹体が白く汚れるため春型枝病斑が見えにくくなる。そのため、散布前に春型枝病斑を切除する時間を設ける。

エ クプロシールドの使用上の注意点

(ア) 薬害防止のため、単用では使用せず必ずクレフノンを混用する。

(イ) クレフノンは直接SSのタンクに入れず、いったんバケツで完全に溶かしてから散布直前にタンクに入れる。

(ウ) クレフノンは薬害防止を目的としたカルシウム剤であり液肥の代わりにはならないことから、日持ち性向上等のカルシウム補給については、別途実施する。

## (3)その他害虫対策

モモハモグリガ、ナシヒメシンクイ等の害虫の発生時期は、モモの生育と同様に早まっているため、薬剤散布が遅れないように注意する。



写真1 モモせん孔細菌病の春型枝病斑

◎近年増加している気象災害に備えるために、収入保険の加入を検討しましょう！

◎防除日誌への記載漏れの無いように農薬散布後は、忘れずに防除日誌へ記帳しましょう。

◎農薬散布の際は隣接する作物に注意し、飛散しないように注意しましょう！

◎適切な生産工程管理のためにGAPシートで確認しましょう

◎農作業事故に注意して作業を進めましょう！